



第4回 アサザ



アサザは水辺に生育する浮葉植物の一種です。浮葉植物とはスイレンのように水底から葉柄を伸ばして水面に葉を浮かべる水草のことです。水辺を象徴する植物として取り上げられる機会の多いアサザですが、河北潟でも、潟端にアサザピオトープができたり、血ノ川に群落が目立って殖えたりしたことで、地域の人たちの関心も高まっています。

石川県河北郡誌には、河北潟に「黄色の花を著くる蓮を生ずる」と書かれています。この書物の中では、オニバスの河北潟での呼称である「蛇蓮」についての説明として書かれています。オニバスは赤紫色の花をつけるので、昔の河北潟の湖岸には、オニバスだけでなく黄色い花をつけるアサザかコウホネがたくさん自生していたのだと思われます。ところが、おそらく干拓を前後して湖岸からは消えてしまい、いくつかの細い水路のみに細々と生き残っていたようです。

現在、血ノ川に大きな群落は数年前に突然出現しました。その前年にヘドロが除去され河口に排水ポンプが設置されたため、川の底床や水の流れが変化したことが関係しているようです。しかし、この場所を除けば、現在の河北潟周辺に所々に小規模の群落が点在するだけで、潟本体にはアサザは生育していません。農業水路の改修にともなって消滅したところ、他の植物に押されてなくなってしまったところなどもみられます。

今から数年前に、当時東大院生の上杉龍土さんが全国のアサザのDNAを調査するなかで、河北潟の何地点かのアサザも調べられましたが、最終的な結果としては、河北潟のアサザは全て同じクローンであるということでした。つまり、河北潟のアサザは毎年種子から発芽しているのではなく、越冬して生き残った株が殖えているだけであるということです。

アサザの花には、雌しべが短く雄しべが長い短花柱花と、雌しべが長く雄しべが短い長花柱花の2つのタイプがあり、新しい種子をつけるためには、この両方の花が必要といわれています。ところが河北潟地域では今のところ短花柱花しか見つかっていません。河北潟地域のアサザが自らは種子を付ける能力をもっていないとしたら、今後何らかの原因で冬芽が越冬できなかった場合や、夏の間群落が枯れてしまったりした場合、埋土種子が存在しないため、新たな発芽が期待できず、消滅する可能性が高いことが考えられます。今のところ、河北潟のアサザが種子繁殖をすることは難しく、将来にわたる保全を考えたときには、何らかの対策が必要です。(文 高橋 久)